音楽と私

シニアアンサンブル取手・龍ケ崎　ピアノ 青木正博

私は70才台に突入する２０１８年に、岡村理事長から誘われて取手SEに入団した。ピアニストが欠員となり、急遽後任を探しているとき、私がピアノ好きだったことを思い出されたのだった。お返事を躊躇うと、「もう十分に高齢になったのだから、仕事以外に楽しみを見つけたほうがいい」との人生訓話も頂いた。ピアノが好きと言っても技術は90％自己流で、アンサンブルの経験はなく、守備範囲は極端にクラシックに偏っている。訪問演奏も行うSEのピアニストとして、自分がお役に立てるとは到底思えなかった。長年敬愛する岡村さんからのお誘いでもあり、固辞するにしても、もっともな理由を述べねばなるまいと思った。まずは表敬訪問と見学のつもりで、練習開場に顔を出してみると、いきなり入団の挨拶をさせられ、楽譜を渡されてこれを弾いてみてと言われた。初見演奏が前提だったと理解し、中途半端な気持ちで来たことを後悔した。しかし、〝やめる！〟のひとことが言いだせずグズグズしている1年間に、合奏の楽しさを覚え、高い出席率を保ったまま今日に至っている。SEでは、お互いに存在さえ知らなかった方達との出会いがあり、豊かな交流が始まり、楽器の演奏をとおして社会ともつながった実感がある。SEの活動を通して、自分が無類の音楽好きであることを再発見したことも、音楽では言葉を介さずに心を結べると知ったことも、収穫だった。持つべきものは優しい親戚である。

私はいま、SE取手とSE龍ケ崎のピアノ担当であると同時に、SE仲間で結成した二つのミニアンサンブルのメンバーでもある。クラシック一辺倒だった私には、ジャズも、タンゴも、ラテンも新鮮に響く。ドラムの軽快な響きとの合奏も格別に楽しい。ヴァイオリン、チェロ、フルートとのデュオやトリオにも出番ができた。長年憧れてきたソロ曲にもまだまだチャレンジもしたい。そんなわけで、いつも70曲ほどを同時進行で練習する生活になっている。実力より意欲が5歩ほど先行するのが生来の質なので、常に練習が追いつかず成功体験は乏しい。お付き合い下さっている楽団仲間の忍耐に合掌。持つべきものは良き友である。

私と音楽との関わりは結構長い。これから健康寿命が尽きるまでの時間もカウントすれば、私は人生の90％を音楽とともに過ごすことになる。両親や、友人や、音楽の先生のおかげにほかならない。美しいメロディーや、楽器を演奏する姿への憧れが、数十年にわたって私を突き動かしている。

小学校の6年間はヴァイオリンを習った。小学校3－4年生の頃には、ピアノも習わせてもらった。いずれも楽器への好奇心と、楽器を弾ける人への憧れゆえに始めたこと。中学生になって、運動競技を始めたり、石への興味が爆発したり、少しは学業のほうも頑張らねばという意識も芽生えて、定期的レッスンの形は卒業した。

6年も習ったのに美しい音が出せないヴァイオリンには次第に距離を置き、音程がくっきりしたピアノと遊ぶ時間が増えた。基本中の基本とされるハノンはやらない。メトロノームは敵。弾けるところだけ弾いてそれ以外はハミングで繋ぐという〝ハイブリッド方式〟で楽しんだ。この方式だと、ショパンもモーツアルトもバッハも弾いた気分になれる。ピアノコンチェルトだってOK。永遠に人前で披露できるレベルまで上達しないが、鼻歌感覚で幅広い音楽を楽しむことはできる。この頃に覚えた多くの曲は、今でもすぐに蘇る。大学の専攻も、就職先も音楽とは関係がなかったし、首都圏の下宿住まいではピアノに触ることも出来ない。私の演奏能力は高校卒業と同時に、数十年にわたる長い足踏み状態に、いや後退モードに入ったのだった。SEに加わってから、合奏という私にとっては新しい分野に取り組むことになり、再び成長モードに切り替わった。思いが高じて、1昨年には、指導経験が豊富で老人にも寛容そうな先生を見つけ、伏して弟子入りさせてもらった。恐れ多くも、モーツァルトのピアノ協奏曲23番を人前で弾けるように特訓してほしいと懇願した。特訓の間に、数十年のブランクを一気に取り戻し、さらに先に進んだ感じがする。持つべきものは良き先達である。

導かれつつ歩んだ、私の幸運な音楽生活が、進歩の予感と相携えてまだ続くことを願っている。